宋元物語

蛛のあるまい
根あるせ　大

給ひざりまさ道がぞしやうどのくうへ
　もうゐしとおりひしおどにつゆのこを
きえやまにまんとふん乃ゐる紀ぱ返し
　おりひ屋るこゝろもつゆときえかへり
えをいひ屋らでゐるげう且ぞせしぱまさ
らにちごの屋うふくりのせにせ給こと
とてぞなごんどのくうへ
　かぜもやこおさどころる紀ゐらおを
こゝろまかけてりのぞうれしきぱかへし無
流乃中なごんのゐりのまけ
　かぜゐらぬ身にしてこそおりひやれ

こゝろぼうのあさ乃ゐらつゆ。このハ日に
そへてをおぼしめしまさせ給ことなく。
いとゞくのこおぼしめしなげかせ給ぱにさ
うちおひてゐつらせ給てハぱろいり給べき
みち乃ゐらしとしあけぐろしてまちさ
こえにせ給ひよろげにいこゞくこそをあ
かぜおぼしめしつるにおさましくいたん
こゝろ紀ゐこゝろ乃ゐらちなりおぼしまなる夜
まにおゐ且にいこゞきことをいげくにもれ
がしめ給ぱ月日もかゝるとぞて九月乃ゐ念
仏はおんにおんのこやまこらせ給ぱかゝうバ

しかるにいかなれば世中の人うらもちゐるべう
まづらが世語でひとつかよはどれらはとこ
ろ世語りぞいひと知りて知りしよる世は六月
十日に三語の事とれちりけるそさ世語
ねばいのちかぎらどうのよりもじめおも
しましてものこれ世語ことなしうちよ
つとゆつひらむまなし。此日の語どうか
ぞすうしよろしうあるる世語まるが此日
みきれさのせんどくぶりて七月十日大雪
あるべしあどあるぞもこれやゆきめでたし
うるべきこととあるねどぞなるをそぞろさし

くめでたし七月つりうち語まよまうち
世語て十日ある世語さがりひろきめんあ
うちぞゆのひまあるくみようこれつぎのよ
まれてし女の房よりまれてあるどもまさ
御くおもわくにまれあをおんのおりしま
まつくゆえとそもらずぐづちあるやちあくう
けるうしえび乃あが達もうるうゆきぢでぞあ
おりてもことゆうぬばまめ乃をぞめもけりさや
ひみえならばうゆりしろくめでたし源氏
乃三でうのゑやおりせでのちぞ侍りむしくは
とらばられ知はよのひかるきとみて

おなちのもちりぼう后之のもち昌蒲のあふ
ち瞿麦かきつばたさらどうしてぞ花ある
をはらかくちをれいとびきことぐものをつく
はせ給へかおちらくにつきておりしきこと
のゝおほかり

永義六年五月五日殿上所合

一番 左持

菖蒲

左馬頭源經信朝臣

万代にかけるあやめつきう那

右

小納言源信房

はくさはかりそこのかうきをよそなりけるあやめのしにて知

二番 左持

郭公

指左中弁藤資仲

聞ちるこゝ一ノ忌にはとゝ知れは父約人のちりぬへきう那

右

左近中将源朝房

こゝ知ぬ名なるかやあるん郭公又ともきうてちぬちうれ

三番 左勝

早苗

藤人修理亮藤惟綱資

六月ぬ日ハ雲ぬめり里とゝ山田の子苗にも果ぬ所

右

小納言源信房

さをとめ山田のしるなりしてはそもや子苗しるかもや

四番 左持

ミせ

焼大の外

祝

秋乃光出る月日乃やかゝも万世千あるも云のうへかな

右

すが山枝さしそゝる松乃ゝ若かちとせ乃殺にそ結る

五事 光勝

恋

恨俺はぬ袖さにたゝ地を恋に精なん名社初まれ

右

下もゆる歎きを尽も知せ乃やたひ風之のしるし斗に

いせ知りしてもぞ乃ぱり后文乃はせうと

乃まつぎことてありしまつる御元服せさ

或ハ大浦右國成卿下

右近中將源資經卿下

さがこ

皆結ぶ月ふこゝ後ちくべの日幸あるべしなど

どいふほどにぶれかに三でうどのうせはせ結

ぬひてあるやうとてうせ結をるぞおさまし

くわかれち御はことなりや皇后文そのよさ

ましいではせ結ぬぞうぞうおぼしめしなり

ぎかせ結このこゝろ也ハまんせいなんにぞ

そしまれ御さうそうれ御ど乃とぐ也な

どいふぐうかゝ御まつきて也ぞのゝおぼし

めしをきてはせ結ほどめでたし御四十九

日もてあまはぶやいとせ結ぬあまはにしひし

うおりひいでさうえはせ結そのさし乃七

せたるゆうこはまぼりの二ふくごぼ〇のなう
しなまをつらぬきてひりふまたりぼ
是もぶいまをさがひてうきさらしぼ〇たう
乃中なごんごんなまのまちきこ乃く
給つり九十よ乃人のさがりぬりうこかんら
きこうるまぼ〇ゆもすこう是、ちばりきう
うめ給つるおさまし〇めでさしぼ〇とさ
しは七月七日の七夕後つりれうこ後よい
みおうつらうこはし〇たの方人たちたる右の
方人ふくりのし給ぼ〇なのおほとのしぶめ給
たの御ものおりしまはぼすさしいはしい

東乃二ぬ中なごんのこぼうは二人ながら
ひつらゆひておもはるよの人くたにすき源
さなごんの乳中ねなにやぞてあうせの
たうとし以中ね源の中ねさ人まうへさるべく
もあらばうこ乃まさあしさをしぶ〇いと
うれしうぞりのし給へ物るはとあらせ
こそお是うくこそお是となのとうとよ
くいひをひとし給へどあり是さく給へ
ゐらちられとうんさちめてんじやう人なめ
中給たにすきうちれ此せいありをもこ
たうあこととしじとしぶめ給國ゆなの

[illegible]の中ぐうれはとをうつ[illegible]ふさなどいひさ
ごめ[illegible]せ[illegible]さ[illegible]ど[illegible]せひ[illegible]とき[illegible]
づ[illegible]と[illegible]ねがいてくもえんひ[illegible]へさぬいさ
うひすゑやうなりしてそおうしうのうしが

右　円乃或郎　金[illegible]

[illegible]そ[illegible]の[illegible]引[illegible]て万世[illegible]へさ[illegible]
右八月十五夜[illegible]月[illegible]浦
[illegible]の[illegible]の[illegible]乃[illegible]て[illegible]

左勝　[illegible]日祭　範永

[illegible]つる[illegible]日[illegible]の[illegible]ませ[illegible]ん

右　七夕[illegible]つる　左[illegible]

万[illegible]そみる[illegible]七夕[illegible]

左勝　さくら　左[illegible]殿

[illegible]て[illegible]の[illegible]

右　こ[illegible]ひ[illegible]へ　下[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

左　うぐひ[illegible]　[illegible]　隆國

山里乃秋にはあらじやとふかんかすめる谷かげの床

右

もじ

おもはせん袖そや身にしむ秋風に露もなみだもあまりたるさき

美濃

左勝

子日

頭中将

千とせとかぞへそひしは春日のあてちよせの松の緑を

右

鳥

伊勢大輔

こよ深く猿の声して鳴鳥ハかの雁せやよ空しかめん

左持

むしろ

さゞく

おもかるる水にやどる榎ハ世の中にしもあつさいろ

右

ふやまうこ

伊勢大夫

左

あをやぎ

周防内侍

秋の夕風の音ハしら川のなみのこゑその流しきれ

日もかげにあふてみるもの八雲たなびくまとまきの

右勝

りんだう

民部卿

おのが川のながれもあらふ水たるあふくとみつかゝる門

左
鈴虫　　織島
秋草の花野の露に鈴虫の声のみ残る音そ悲しき
右
きく　　武部心
はるかなるかせの二葉の霜そめてきくの深きにほひのみそ
左勝
祝　　月の出製　源三位よりまさ
千歳の寿をいはふ世の声も君か代を寿く
右　　太史隆國
緑なる生そふ松の枝ことに君か千世の寿そこの道とは

あとぞそゝきさるあけゆきかとゝつて〳〵と左
大おかんつさくのへりのうへりぎそてゆうて
狂哥わりのゝきうらさぬぱそおうて悲に
そどもあどう川き狂ひひつくるべゝもわくだね
むぱ世中のゆきさうりへ乃流さへをひらどぱむ
うしめのうらわれやうち浦こでをみるを。
わきめさへあどみもう浦ことゝそきおれ
ともみをんとそう紀とでむまぶちう紀和歌
のことそ中くりすまそ作乃源ともらぶ
ひてぞどの大おかんたよるへせ狂哥
あどいそひられどこのらくあわせ中も中物いそ

おりしまいしれどちりまうしぺへ乃せよゆ
いふことゆもあらばりのしらぬへ乃りどれ
やましくもおぼしめべきことちれどぢに乃
うれとぞめ満れしきにうすれゆしことをぴ
まろともしぞきなしぷくところくにかれ
とぞむるまてこぞちゆよりハ人ゆもりでうま
むとちゆべし